



Book Talk

編集・発行 海南高校図書館
第13号 2012. 02. 15.

▼ 森見登美彦 氏



森見登美彦は、強烈な登場人物と、ばかばかしいほどの柔らかさを込めた堅苦しい文体、そしていかにも嘘だろうという嘘で物語を牽引する。主人公は根性なしの大学生であることが多く、憧れの対象である黒髪の乙女はどこか普通の人とは言い難く、友人はとびっきり頭の切れる変な人か、とびっきり悪知恵の働く変な人である。四字熟語や古めかしい言いまわしを駆使する登場人物たちは、言葉遣いこそ難解で居丈高ではあるが、その内容はひどく気弱であるがゆえに憎めない。彼らの日常を構成する小道具の中には、森見作品の世界だけに存在するものがいくつかある。例えば「猫ラーメン」。「猫から出汁を取っているという噂の屋台ラーメン」で、「その味は無類」だそうである。食べてみたい。「詭弁論部」があるのならばひ顧問をしたいし、「偽電気ブラン」というお酒があるのならばひ飲みたい。とはいえこれらは見るからに嘘であるというのが名前からしてわかる。フィクションなのだから嘘が交じるのは当然と言えば当然だ。しかし幻想と妄想に彩られると、虚構は虚構に見えなくなるのだろうか。あるはずがない世界のあっても不思議ではない日常を読んでいると、その中にさりげなくまぎれて現れる嘘のものは、私が知らないだけでこの世界にも実は存在しているのかもしれないという思いを持ちたくなる。疑いようのない嘘であることを理性では認識しながらも、なおそれが実在することを期待したくなるのだ。

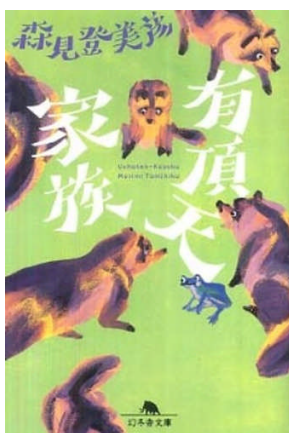


森見登美彦の名を一躍有名にした作品は『夜は短し歩けよ乙女』である。主人公は京都の四畳半に下宿する大学生の「先輩」で、クラブの後輩である「黒髪の乙女」とお近づきになろうと奮闘する。しかし彼の作戦が遠まわし過ぎることと彼女があまりにも恋愛以前のおっとりタイプであることで、なかなか恋愛成就に至らない。しかしありがちな恋愛ものと一線を画するのは、登場人物の造形が秀逸だからであろう。「先輩」の語りと「乙女」の語りが交互に展開され、その対比が愛すべき「先輩」のダメっぷりとふわふわした「乙女」のかわいさをお互いに引き立て合う。一見無駄に見えるかのような細々した一つひとつのエピソードが積み重なり、しみじみとした温かさを醸し出していく。その温もりに後押しされ、「どうかこの二人に幸せを！」と読みながら思わず願ってしまう。

森見登美彦の作品は大学生もの『太陽の塔』『四畳半神話体系』の他にも、怪談『きつねのはなし』『宵山万華鏡』、名作を下敷き

にした『【新釈】走れメロス 他四篇』、エッセイかフィクションかわからない『美女と竹林』、書簡体小説『恋文の技術』など多彩である。私が一番好きなのは『有頂天家族』だ。第一章

はこんなふうが始まる。「ある引退した天狗が、出町商店街の北にあるアパート「コーポ桝形」に住んでいた」。天狗とは引退するものなのか。なぜ引退して住む先が「コーポ桝形」などという名前のアパートなのか。そもそもなぜ天狗が出てくる。…と、一行目にしてツッコミどころ満載である。主人公の矢三郎が狸である時点でまず「おいおい」となるのだが、登場する狸一家は人間の家族と勝るとも劣らない固い絆で結ばれている。父は偉大であり、母は愛情深く、真面目な長兄と「井の中の蛙」である次兄と不甲斐ない弟に挟まれた矢三郎は「面白きことは良きことなり！」を信条に、師であった天狗を慕い、人間の美女に恋をし、犬猿の仲である双子狸と喧嘩をしながら家族のために奔走する。狸と天狗と人間の三つ巴が繰り出す冒険と恋愛は、読む者をどきどきさせ、ときに涙を誘う。また、第二章には次のような一節がある。「世に蔓延する「悩みごと」は、大きく二つに分けることができる。一つはどうしてもよいこと、もう一つはどうにもならぬことである。そして、両者は苦しむだけ損であるという点で変わりはない。努力すれば解決することであれば悩むより努力する方が得策であり、努力しても解決しないことであれば努力するだけ無駄なのだ」。悩みごとができれば、私はこの一節を思い出す。そして努力する。しかし努力しきれない、割り切れない、というときに私はこの作品を読み返し、悩むより努力するための英気を養うのだ。



森見登美彦はブログ「この門をくぐる者は一切の高望みを捨てよ」も楽しい。そのブログによると彼は今増えすぎた締め切りによる体調不良のため休業中らしい。心ゆくまで養生し、また素敵な物語を生みだしてほしい。



猫ラーメンが食べたあい!

堀先生(英語科)から、異次元ワールドへの招待

(英語科 堀 亜希子)